

## 上映会&シンポジウム

「沖縄」をメディアはどう伝えるか ～ 映像から沖縄と日米関係を考える

主催 上智大学メディア・ジャーナリズム研究所  
文化経済フォーラム

日時 : 2018年6月16日(土)  
13:30～16:30(開場13:00)  
会場 : 上智大学11号館3階 11-311教室

登壇者 : 具志堅勝也(文化経済フォーラム理事長・元琉球朝日放送報道制作局長)  
齋加尚代(毎日放送報道局ディレクター)  
音 好宏(上智大学メディア・ジャーナリズム研究所所長)

近年、「沖縄」を巡るメディア状況は、大きく揺れている。

周知の通り、第二次大戦後、沖縄は本土とは切り離され、米軍のアジア戦略のキーストーン(要石)として、27年間にわたる米軍統治下に置かれた。1972年の祖国復帰後も、沖縄には多くの米軍基地は残り、今日まで続く普天間基地の移転問題に象徴されるように、沖縄は常に日米安保体制のなかで、翻弄され続けてきた。

その間、地元・沖縄のメディアは、沖縄の声を拾い上げるとともに、本土のメディアとあるときは連携し、あるときは競争をしながら、「沖縄」の問題を広く伝える役割を果たしてきた。特に米軍基地問題など、日米安保体制に関わる問題に関しては、日本全体の問題としてとらえ、問い直す役割も果たしてきた。歴史的にも、政治経済的にも、「沖縄」と向きあうことは、現在の日本という国が置かれた状況を見つめ直すことにつながるのはいままでもない。

ところが、近年、米軍基地問題に絡んで、地元・沖縄のメディアや、記者個人に対して、誹謗・中傷など、あからさまな攻撃が行われるケースも目立ち始めている。いま、沖縄の報道を問うことは、いまの日本のメディア状況を考えることにもつながろう。

本シンポジウムでは、本土と沖縄のメディアに身をおいてきた二人のジャーナリストの映像作品と報告をもとに、戦後、日米安保体制の最前線に置かれ続けてきた「沖縄」に対して、メディアが、そして個々のジャーナリストが向きあうことの意味を改めて問い直し、その意味と課題を考えてみたい。

以上

『映像'15なぜペンをとるのか～沖縄の新聞記者たち』(2015年9月27日放送)